

医学部人気に思うところ



札幌市医師会
手稲いなづみ病院

齊 藤 晋

新年明けましておめでとうございます。年が明けるとセンター試験が始まり、大学入学試験がいよいよ始まります。近年、医学部を志す受験生が年々増加傾向にあると聞きます。私が受験生であった頃は逆に医学部定員が減らされ、当時合否上にいた私は最後の共通一次試験で現役時代よりも点数が下がり、医学の道を諦めるか否か非常に悩ましい時期があったことを思い出します。結果的に母校に拾ってもらい、医師になることができました。平成28年度の医学部定員は9,262人でした。私が受験生の時は8,000人を切っていましたので、実に医学部約12校分以上の定員が増えたこととなります。さらに、来年度は成田市に医学部が新設されることが決まっております。入学定員は9,400人を超えます。定員増のほとんどは「地域枠」と呼ばれるものです。平成16年、新医師臨床研修制度がスタートしました。それにより、大学病院に残る研修医が大幅に少なくなり医局制度が崩壊しました。市中病院は多くの症例、手技を経験でき給料も良い、逆に大学病院は症例が少なく、薄給の上に雑用ばかりだと思われ、市中病院での研修を希望する研修医が増え、大学医局は衰退の一途をたどりました。大学は人材が残らなくなったため、関連病院から医師を引き上げなければならなくなりました。地域医療の崩壊です。焦った国は、地域の医師確保のため緊急医師確保対策として医学部定員増を閣議決定せざるを得なくなり、増員に増員を重ねあつという間に9,000人を超えました。分母が増えれば、地域医療を担う人材も増えるだろうと安易に考えたのでしょうか。定員増分は、地域枠を設けることによって卒業生医師の他県への流出を防ぐため、縛りを強くしたはずですが。しかし残念なことに某大学では、地域枠で入学した卒業生が県内には残らず他県の医療機関に就職したことが報じられていました。同じようなケースは今後北海道でも他県でも十分起こりえると思います。日本国憲法にある職業選択の自由が認められている限り、地域枠の拘束力は極めて弱いものであります。

全国81ある医学部には一学年の定員が140人という大学もあります。解剖学実習をはじめとした実習はきちんとできるのでしょうか？ 病棟実習は回れるのでしょうか？ 医師養成専門学校と化してしまっていないのでしょうか。また、新専門医制度が延期にはなりましたが、平成30年度から始まろうとしています。市中病院での初期研修、後期研修だけで

は専門医取得が困難な状態になる診療科もあり、大学病院を中心とした研修を積まなければならなくなりそうです。今度は医局制度の復権です。大学病院とそれを中心とした基幹病院への研修医の集中は避けられません。それに伴い指導医もそれぞれの臨床研修プログラムに則り、大学病院、基幹病院へ集中させなければなりません。これは、さらに地域医療の崩壊を進める要因となり得ます。診療科の偏在はいつまでたっても解決しません。救命救急や外科、産科を志す研修医が少ないと聞こえてきます。自分のQOLを大事にしたい研修医が多いようです。国は医療費膨張抑制のために、平成32年度から医学部定員を減らす検討に入っています。医学部定員を減らす方向に舵をきろうとしているのに、医学部が新設されるといった全く理解できない現象が起こっています。もうすでに1,000人以上も医学部定員を増やしていますが、簡単に減らせるものでしょうか。それぞれの医学部には、国公立、私立大学ともにヒト・モノ・カネといった思惑がありそうです。地域医療はどうなるのでしょうか。広い北海道の地域医療問題は非常に深刻です。地域枠を残し、都市部への医師の集中を回避したいと考えている一方で、新専門医制度により大学病院への集中が起こります。

某医療ドラマの世界では、失敗しない医者が出てきて白い巨塔と真っ向勝負です。「私、失敗しないので」。フリーランス外科医が完璧なオペで困難症例を解決していく姿は、実に見ていて痛快です。最後には高級メロンと高額な請求書がやってきます。フィクションの世界のことなので面白半分で見えますが、本当にありえないとも限りません。

新年から好き勝手なことを書きました。受験生に春が来ますように。日本の医療と介護、福祉が整備され、国民が心から“御意”と言えるような安心できる医療を提供できる将来を心から願って、新年のご挨拶とさせていただきます。